群教セ	G05 - 04
	平16.221集

自分のイメージを主体的に表現に生かす音楽科指導の工夫

― 和太鼓でリズムを創作する活動を通して ―

特別研修員　　伊藤　尚毅　　(高崎市立中尾中学校)

《研究の概要》

本研究は、表現したいことを自由にイメージし、そのイメージを生かしてリズムを創作する活動を通して、表現に主体的に取り組むことができるようにしたものである。リズム楽器に和太鼓を用い、イメージを音にしやすくするために口唱歌(くちしょうが)を取り入れたり、表現を深めることができるようにグループによる話合い活動を取り入れたりするなどの指導の工夫を行った。

【キーワード：音楽－中　表現活動　リズム　創作　日本の音楽】

Ⅰ　主題設定の理由

生徒が音楽のもつよさを感じ、深く味わうことによって、生涯にわたって音楽を愛好する心情を身に付けるには、生徒が意欲をもって主体的に音楽にかかわっていく必要がある。そのためには、学習内容が生徒の技能や実態からかけ離れたものではなく、活動の見通しがもてる内容であると同時に、どの生徒にとっても学習に深まりを感じられることが大切である。

本校の生徒は、音楽経験や変声などの発達段階によって、読譜力や歌唱・楽器の技能に差があり、限られた時数の中で曲を十分に表現できない生徒もいて、そのことが意欲面での差につながる場合もあった。また、今までの指導では、曲を練習する過程で教師の視点が個よりも集団に向けられることが多く、一人一人の思いよりも曲の完成に向かって効率的な指導を行うことが多いのが現状であった。個人の活動やグループ活動も取り入れてきたが、その多くは練習の場面に限られ、生徒の考えを生かした表現をグループで工夫する時間は十分でなかった。これらは生徒の活動への意欲的なかかわりを阻む要因となっている場合もあり、改善したいところである。こうした現状に対し、生徒が活動に主体的にかかわろうとする意欲や態度をどの生徒にも育てていくためには、生徒一人一人が自分なりの課題をもち、最も自分に合った方法で課題追求に取り組める学習場面を設定していく必要がある。そこで、その学習場面の一つとして、自分なりのイメージで自由な発想による創作をする活動を行えば、生徒が自分で考えたり工夫して表現したりすることに主体的に取り組めると考えた。

本研究では、自分のイメージを生かした創作をリズムについて行うこととした。これは、生徒が旋律や調性などにとらわれず、自由な発想で無理なく創作できるからである。この場合の創作は、まずリズムで表現できそうなものをイメージし、イメージしたものをリズム楽器を用いて工夫して表現することである。リズム楽器には和太鼓を用いる。和太鼓は拍節的なリズムの他に、非拍節的なリズムで表現することもあり、生徒が自由な発想で創作できる。また、力強く勇壮に叩くという表現方法がある一方で、繊細に音を表現できる楽器でもあり、撥(ばち)や打ち方を変えることによって音色に幅をもたせることができる。生徒は自分の心に浮かんだイメージを表現するために、実際に音を出しながら音楽の諸要素を取り入れたり、楽器の特徴を生かしたりして、表現を追求していくであろう。

音を出し、工夫していくという活動は、生徒の主体的なかかわりが不可欠であり、この活動を通して生徒が自ら表現に取り組むことができると考え、本主題を設定した。

II　研究のねらい

和太鼓による音楽表現の学習に、自分のイメージを生かしてリズムを創作する活動を取り入れれば、生徒一人一人が主体的に表現に取り組むことができることを実践を通して明らかにする。

III　研究の見通し

1　イメージをもつ過程で、標題のあるリズム演奏を聴く活動を取り入れれば、イメージと表現のかかわりがつかめ、自分なりのイメージで創作のテーマを決めることができ、表現への見通しがもてるであろう。

2　表現を工夫する過程において、試行表現するために口唱歌を取り入れれば、リズム、強弱、速さ、音色などの諸要素に着目し、自分のイメージに合った表現を工夫できるであろう。

3　表現を深める過程において、自分の表現を生かしてグループでリズムを創作する活動を取り入れれば、さらにイメージがふくらみ、表現が深まるであろう。

IV　研究の内容と方法

1　研究の内容

(1)　イメージを主体的に表現に生かすことについて

生徒が表現に主体的に取り組むためには、生徒自らがイメージをもち、そのイメージを表現に生かすことが大切である。自分が「こう表現したい」という思いが表現にかかわってこなければ、音楽は音の羅列になり、表現の深まりは見られない。そこで、学習過程の中に、自分のイメージをもつ、イメージを表現に生かす、自分のイメージした表現をグループの中で生かす活動を取り入れれば、自分の内面に生じたイメージを大事にして表現することができ、意欲的に取り組めると考えた。

(2)　リズムを創作する活動について

生徒はリズムを創作していく際、音を擬音化した口唱歌を唱えることによって、よりイメージに近い創作や表現の工夫ができると考えられる。また、拍節的なリズムの創作に限定せずに、非拍節的なリズムや音色などの音楽の構成要素に加え、速さの変化や強弱、間などの音楽の表現要素に着目し、自分のイメージを大切にしたリズム表現ができるようにする。イメージを記録する場合は、口唱歌を文字化したり自分にわかりやすい図形楽譜などを工夫したりするなどの自由表記とする。このような創作の活動は、読譜や作曲理論に苦手意識をもっている生徒にとっても、主体的に活動にかかわろうとする意欲や態度を育てるのに効果的であると考えた。

(3)　表現を工夫し深める活動について

生徒が自ら考えたり試行錯誤しながら表現を工夫していくことは、音楽を形成している諸要素を感じ取り、表現に対する自分のイメージを深め広げていくことへとつながり、音楽性を高める上で大変重要なことだといえる。自分のイメージした表現に近づけるために、音色の違いがどのようにして生まれるのかをいろいろな奏法を試して認識したり、曲想が速さ、強弱、間

によって生み出されることを口唱歌を使って体験したりすることで、表現が工夫されていくと考える。また、グループで話し合ったり教え合ったりする活動を取り入れて、一人一人のイメージを広げたり、表現を深めていきたい。グループでは個人の作品をつなげたり場合によっては組み合わせたりして、一人ではできない表現や友達と一緒に表現する楽しさを味わわせたい。

2　研究の方法

研究の見通しに基づき、次のような方法で授業実践を行い、検証する。

(1)　授業実践計画

対　象	高崎市立中尾中学校１年３組39名		
題材名	イメージを和太鼓で表わそう	期　間	11月　全４時間
抽出生徒	A男；元気よく表現に取り組めるが、音色や歌声、強弱に気を付けて表現しようとする意識があまりない。創作をする過程で音楽を表現するのに必要な要素を感じ取ることを通して、それらを生かして工夫して表現できるようにしたい。 B子；自信がないためか積極的に表現できずにいる。本活動で表現することの楽しさや友達と表現を合わせる喜びを体験することを通して、自信をもって表現に取り組めるようにしたい。		

(2)　検証計画

検証項目	検　証　の　視　点	検証の方法
見通し1	イメージをもつ過程で、和太鼓による自然音や効果音を表現したリズム演奏を聴く活動を取り入れることは、イメージと表現のかかわりがつかめ、自然や身近なもの、体験などから、自分なりのイメージで創作のテーマを決めることに有効であったか。	観察、ﾜｰｸｼｰﾄの記述
見通し2	表現を工夫する過程において、リズム、強弱、速さ、音色などの諸要素に着目して試行表現するために口唱歌を取り入れたことは、イメージを表現しやすくするとともに、和太鼓の特徴を生かし自分のイメージに合った表現の工夫をすることに有効であったか。	観察、ﾜｰｸｼｰﾄの記述・記譜、演奏
見通し3	表現を深める過程において、グループ活動の中で自分の表現を生かすために友達と話し合ったり教え合ったりする活動を取り入れることは、友達と合わせる楽しさを体験しながらイメージをふくらませ、一人ではできない表現の工夫や演奏効果の向上に有効であったか。	観察、ﾜｰｸｼｰﾄの記述・記譜、演奏

Ⅴ　研究の展開

1　題材及び題材の考察

題材　イメージを和太鼓で表わそう
考察；本題材は、和太鼓の特徴を感じ取り、表現できそうなことを身近なものからイメージし、リズムで表現していく活動である。リズム、音色、強弱、速さなど音楽を特徴付けている諸要素に着目し、作曲技法にとらわれずに自由な発想で創作する過程で、生徒は主体的に活動に取り組めると考える。
教材について；本研究では、自分のイメージを表現するリズム楽器に和太鼓を用いる。また歌舞伎の黒御簾（くろみす）音楽を参考教材として取り上げる。黒御簾音楽は和太鼓を中心に雨、風、雷、波、幽霊などの情景を表現する。このような音楽を参考にして生徒は多様な表現方法を工夫し、自らの表現の幅を広げることができるであろう。さらに、和太鼓では演奏の仕方や表現方法を、「ドンドン」や「ドンドコ」のように音を擬音化した口唱歌によって伝承してきた。それは日本の伝統音楽に共通の伝承法であるが、他の民族音楽にも見られ、指導に発展性がある。授業ではこの口唱歌を活用することによって、楽譜にとらわれずに表現や創作に取り組んでいけると考えた。

2　目標及び評価規準

目標	自分なりのイメージをもち、音楽の諸要素を生かしながらイメージをまとめ、工夫して表現する。			
	評　価　の　観　点			
	ア 音楽への関心・意欲・態度	イ　音楽的な感受や表現の工夫	ウ　表現の技能	エ　鑑賞の能力
題材評の価規準	・和太鼓の音色や表現の特徴に関心をもっている。 ・打ち方や表現を工夫して和太鼓を演奏することに意欲的である。	・和太鼓の音色や表現の特徴を感じ取っている。 ・和太鼓の特徴をもとに自分の表現したいイメージをもち、表現するための工夫をしている。	・和太鼓の基礎的な奏法の技能を身に付けている。 ・和太鼓の音色や奏法による表現の特徴を生かして、自分のイメージを和太鼓で演奏する技能を身に付けている。	・和太鼓の特徴を意識しながら、友達の演奏のよさを聴き取っている。

3　指導と評価の計画（全４時間予定）

過程	時間	学習活動	支援及び指導上の留意点	○おおむね満足できる具体の評価規準【評価方法】 ◎十分満足できると判断できる状況
イメージをもつ	1	・和太鼓の演奏をビデオや範奏で視聴し、感じたことをﾜｰｸｼｰﾄに記入する。 ・口唱歌を唱えながら、音色や速さ、強弱の変化に気をつけながら和太鼓を演奏する。 ・標題のついている和太鼓の演奏を知ったり聴いたりして自由な発想によるイメージをもち、表現したいテーマを決める。（見通し１）	・音の響きや打ち方、打つ姿に注意して視聴させる。 ・口唱歌の言葉で響きや音色が変化したり、速さや強弱の違いを伝えることができることを示し、表現の幅を感受できるようにする。 ・標題のついている和太鼓の演奏や歌舞伎の黒御簾音楽について説明したり、CDを聴かせたりし、和太鼓による表現の豊かさを感じ取らせ、イメージをもつ手がかりとする。 ・イメージをもつ手だてとして、これまでの体験や想像、自然音や身近にあるものなどからテーマを見つけ出せるようにする。	○和太鼓の音色や響き、速さや強弱の特徴に関心をもっている。ア―① 【観察・ワークシート】 ◎和太鼓の特徴について十分な記述がワークシートに書かれている。 ○和太鼓の奏法による音色や響きの違いを感じ取っている。イ―①【観察】 ◎音色や響きが奏法や撥の違いで変わることを理解しその違いを感じ取っている。 ○和太鼓の特徴をもとにして自分の表現したい音や音楽をイメージできる。イ―②【観察・ワークシート】 ◎ 和太鼓の特徴を十分に生かしたイメージがワークシートに記入されている 。
表現を工夫する	2	・自分のイメージを唱歌にして歌ったり、音を出したりしながら表現を工夫し、ワークシートにイメージをまとめる。　（見通し２）	・イメージを表現するために、音色、速さ、強弱を工夫するのに口唱歌を用いると表現しやすいことや、撥や叩く場所を変えると音色が変わることを説明し工夫の手だてとする。 ・まとめ方については、言葉、楽譜、図形など自由表記とする。	○音色や強弱、速さなどを変えながら自分のイメージを工夫している。 イ―③【観察・ワークシート・演奏】 ◎表現したいイメージが音楽の要素や和太鼓の特徴を生かして工夫されている。
表現を深める	3	・前時で各自が作った表現をグループ内で発表し合う。 ・個人の表現をもとにグループでテーマを決め、音を出しながら表現を工夫する。 ・テーマにより近づくために表現の効果を考える。 （見通し３） ・自分たちの表現の特徴をワークシートにまとめる。	・グループ分けは、前時で生徒個人が創作したイメージの内容をもとに教師が行う。 ・各自の表現をつなげたり組み合わせたりしてグループとしての表現をまとめていくように助言する。 ・表現についての話合いや音の出し方を教え合うようにして、より工夫した表現ができるようにする。 ・生徒が自由に和太鼓のビデオやCDを視聴できるようにし、打ち方や強弱、テンポ、間の取り方、掛け合い等について参考にし、工夫できるようにする。 ・グループの響きの特徴とイメージしていることをより明確にするため、ワークシートに言葉や図形などを用いて自由表記する。	○自分のイメージした表現を音色や奏法の特徴を十分に生かして豊かに表現できる。ウ―①【演奏】 ◎和太鼓の特長を生かし自分のイメージを友達にわかるように表現することができる。 ○よりよい演奏をしようと打ち方や表現を工夫して和太鼓の演奏に意欲的に取り組んでいる。ア―②　【観察・演奏】 ◎グループの中で自分の表現を十分に生かしながら、友達と教え合い表現を深めている。
まとめ・発表	4	・テーマと表現の特徴を説明し、グループで創作した表現を演奏する。 ・他のグループのよいところや気づいたことをワークシートにまとめる。	・他のグループの演奏を聴いて、テーマと感じ取った音色や奏法の特徴を関連づけられるようにする。 ・ワークシートにまとめたことを何人かの生徒に発表させる。	○グループでイメージした表現を和太鼓で演奏できる。ウ―②【演奏】 ◎グループでの表現のよさを十分生かしながら演奏している。 ○友達の演奏を、音色や響き、奏法の特徴などに留意して、テーマと工夫した点を関連づけながら聴き取っている。エ―①　【ﾜｰｸｼｰﾄ】 ◎演奏を聴いて気づいた点や感じ取ったことをワークシートにまとめられている。

Ⅵ　研究の結果と考察

1　イメージをもつ過程で、和太鼓による自然音や効果音を表現したリズム演奏を聴く活動を取り入れることは、イメージと表現のかかわりがつかめ、自然や身近なもの、体験などから、自分なりのイメージで創作のテーマを決めることに有効であったか

歌舞伎の黒御簾音楽で「川の流れ、川のごみ、雪、風」の音を聴かせ、音の大小や打つ場所を工夫すると音色が変わり、多様な表現ができることをつかませた。太鼓を普通に打ったのでは出せない雑音のような音はどのように出しているのか、雪の音はどのように出しているのかその奏法を知りたがる発言があちこちからあがった。最初は太鼓で表した「川」や本来聞こえない「雪」の音に戸惑っていたようだったが、黒御簾音楽は聴けばすぐにわかるものの他に、雰囲気を表しているもの、解説や演技と一緒に伝えていくものもあるということを説明し、自由な発想で考えてよいことを伝えた。その結果、生徒は太鼓で表現できそうな音として「花火、水、風、生活音、動物、祭り、水風以外の自然、災害」などのイメージをもつことができた。生徒は自分で考えたいくつかのイメージの中から、自分が表現したいテーマを太鼓を打ちながら決めた。抽出生徒のＡ男は、「噴火、台風、雷、祭り、背後から何か迫る音」をイメージした。その中からテーマとして選んだのは「雷の音と雨の音」であった。最初は「雷が落ちた音」を表現しようとしていたが、雷が落ちる時のことを思い出し、「雨の音」も入れたほうがより雰囲気が出ると考えた。Ｂ子は、ビデオ視聴後のワークシート「和太鼓を聴いて感じたこと」の項目を記入できないでいたが、黒御簾音楽を聴いて、いろいろな表現があることを知ると、「花火」をイメージすることができた。ワークシートには「雰囲気を表すことが大切」とメモ書きをし、最初は２～３回強く打つだけであったが、花火の音を聞いた時のことを思い出し、高崎祭りの花火をイメージし、たくさんの花火が打ちあがったところを表現することに決めた。最終的には「祭りの終わりの花火」をテーマとした。

以上のことから、和太鼓による自然音や効果音を表現したリズム演奏を聴く活動を取り入れることは、イメージと表現のかかわりがつかめ、自然や身近なもの、体験などから、自分なりのイメージで創作のテーマを決めることに有効であったと考えられる。

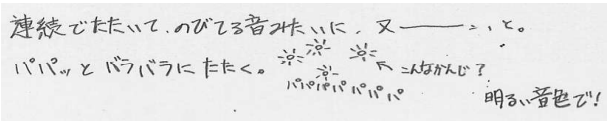
2　表現を工夫する過程において、リズム、強弱、速さ、音色などの諸要素に着目して試行表現するために口唱歌を取り入れたことは、イメージを表現しやすくするとともに、和太鼓の特徴を生かし自分のイメージに合った表現の工夫をすることに有効であったか

表したい表現をまず口で言い、近い音が出せるように工夫していくとイメージに近い音が出せることを説明した。その結果、生徒は小さな声であったが、表現を声に出しながら音をどのように出したいか考えた。生徒の多くは、ワークシートに「ドン、ドーン、ドオーン、ドド、カン、カカ、　シンシン、バン」などの音を擬音化した口唱歌を記入した。さらにその口唱歌とともに、様々な強弱記号や速さの変化が記されていた。間を空ける場合は「ド・ド・・ド・・・」と記入されていた。実際に声を出しながら表現を工夫していた生徒は半数ほどであったが、部分的に声を出し自分の出したい音を求めて撥を換えたり、打つ場所を替えたりした生徒は多かった。Ａ男はワークシートに「タンタンタンタン　バチバチバチバチバチ　ドーンドーンドーン」と記入した。雨、雷の落ちる前の音、雷の落ちた音を表現している。強弱についての記述はないが、言葉から強弱や速さをつかむことができる。「バチ」のところは、鼓面に太鼓の撥を置いて「バチ」に近い音が出せるように工夫していた。Ｂ子は花火の上がる音を「ヌー」、祭りの最後のたくさんの花火を「パパパパパ」と表した（次ページの資料１）。Ｂ子は明るい感じを出したいと考え「パ」を使ったと書いている。「ヌー」のところは軽く細かく打ち、明るい音色は打つ場所を替えて音を出したいと話してくれた。打つ場所は鼓面のふちの近くや

ふちを叩いて工夫していた。グループ学習の話合いの中でお互いの音を表すのに口唱歌は不可欠なもので、どのグループからも口唱歌が聞かれた。

以上のことから、口唱歌を取り入れることは、和太鼓の特徴を生かし自分のイメージに合った表現の工夫に有効であったと考えられる。

資料１　ワークシートの記述



3　表現を深める過程において、グループ活動の中で自分の表現を生かすために友達と話し合ったり教え合ったりする活動を取り入れることは、イメージがふくらみ、表現の工夫や演奏効果の向上に有効であったか

自分のテーマをグループの中でどのように生かせるか、また、どのように表現を深めるか考えながら話合いをした（資料２）。一人一人のイメージを生かすため、ストーリーのある作品にまとめた班が多かった。また、大きな音を出すために同時に打ったり太鼓を複数使ったりして工夫した班もあった。生徒は感想に、「みんなと音を組み合わせるのが大変だったけれどアドバイスをいろいろ受けて音を工夫することができた」「意見を出し合って悪いところを直せるのがいい」と書いている。Ａ男は「地球誕生」というグループのテーマの中で、誕生したばかりの地球に雨が降り雷が鳴り響く役割を担当した。グループの中でＡ男の雨の音を強く表現し、地球誕生時の激しさを出したほうがいいと話し合われた。また、雷の表現を他の生徒にアドバイスをしている姿が見られた。発表場面ではＡ男は打つ速さ、強さを増したことで、雨の激しさをよく表現していた。Ｂ子は花火が上がってたくさんの花火が爆発し、最後に散っていく様子を友達と話し合った。花火が上がっていく様子はＢ子の考えた打ち方を使い、グループ全員でより細かく打ち、だんだん大きく音を出すことによって花火が上がる様子が表現されていた。Ｂ子も他の生徒と共に積極的に力強く音を出すことができた。

以上のことから、グループ活動の中で自分の表現を生かすために友達と話し合ったり教え合ったりする活動を取り入れることは、イメージがふくらみ、表現の工夫や演奏効果の向上に有効であったと考えられる。

資料２　話合いの様子

Ⅶ　研究のまとめと今後の課題

○　自分のイメージを生かしてリズムを創作することによって、普段は積極的に表現できない生徒も自分の考えをもち、自分なりの方法で表現することができた。また、グループ学習では友達と話し合い、一人ではできない表現に発展させていた。これは、生徒が表現に主体的に取り組んだからであると考える。

○　生徒は口唱歌を用いたり友達と話し合ったりして、表現を工夫することができた。しかし、中には自分が工夫したことと音楽の諸要素を使って説明することがうまくできない生徒もいた。工夫したことが諸要素と結びつくような支援やワークシートの工夫が必要だと感じた。

○　イメージを生かして表現することは、他の題材や領域でも重要なことである。歌唱や楽器、鑑賞などでも生徒一人一人のイメージを生かすことができるような学習活動について、さらに研究を深めていきたい。